

○角田由美子* 今井哲夫** 岡村浩***

(*昭和女大, **都皮技センター, ***昭和女大・院)

目的 近年、消費者からの毛皮製品に関するクレームは毛抜け、革部の破れや変色が多くなっており、保存による毛皮の性状の変化は大きいものと考えられる。しかし、これらの性状の変化について検討したものはあまり見当たらない。毛皮の自然環境での劣化や耐用年数の割り出しの基準となる基礎的なデータを得ることを最終目的として、本報では正常なミンク毛皮を試料として、室内で保存した場合の毛皮の性状の変化について検討した。

方法 実験に用いた試料は、サファイアミンクの雄でナチュラル（未染色）毛皮を40枚、サファイアミンクのグレー染め毛皮を40枚用いた。いずれも市場で流通している一級品である。毛皮の保存方法は、東京都墨田区にある RC 造の北向きの部屋にプラスチック製の衣装箱を置き、毛皮を一枚ずつ紙に包んで防虫剤（パラジクロルベンゼン）と共に衣装箱に5年間保存した。保存前後について毛抜き強さ、引張切断荷重、引裂荷重、伸び率、剛軟度、色差を測定した。また、毛を取り除いた試料について化学分析を行なった。

結果 1) ナチュラル毛皮の毛抜き強さは、保存によりやや低下する傾向が認められた。2) グレー染め毛皮の剛軟度は保存により大きくなり、やや硬くなる傾向が認められた。また、伸び率の減少および引張切断荷重の低下が認められた。3) ナチュラル毛皮の色差 (ΔE^*) は、保存によりあまり変化は認められなかったが、グレー染め毛皮の色差は大きくなり、保存により退色する傾向が認められた。これらからナチュラル毛皮よりもグレー染め毛皮において保存による影響が大きいものと考えられる。